

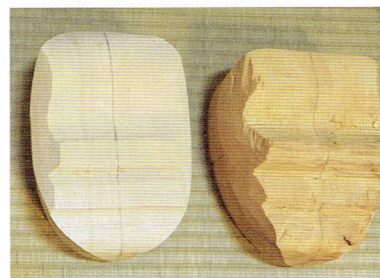


シニアライフアドバイザー
松本すみこ

南アリア代表、NPO法人シニアわーくすRyoma 21理事。シニアライフアドバイザー、キャリアコンサルタント。早稲田大学第一文学部卒業。団塊・シニア世代の動向研究とライフスタイル提案、市場分析などを行い、講演・執筆など多数。外国人と日本人が交流する日本語ネットカフェ「WA」主宰。著書に「地域デビュー指南術～再び輝く団塊シニア」（東京法令出版）など。

能楽堂」で行う日本伝統文化の会「華の会」の祭典。そして、10月末と11月最初の週に、筑波山の麓にある古民家で行う秋祭り。どちらも毎年恒例の行事だ。さらに、主宰する「能面・花玄会」の生徒さんたちの展示会を開催し、成功させたいと考えている。

荒さんは、手がけている面の材料として、少し黒ずんだ檜ひのきの手に取った。大阪城修復の際、石垣改修時に出てきた檜材だという。廃棄されるところを、大阪湾まで追いかけて手に入れた。「土台に使



左は本来の能面用の檜材、右は大阪城の改修で手に入れた檜

われる檜は、本来、能面に使うものではないんです」と言いながらも、何か思案中のよう。

「能面打ちとは、創作ではなく、

シニアも学べ、伝統工芸

荒さんが学んだ師匠は現在76歳で、カルチャーセンターといわれる世界に初めて登場した能面師だそう。それまで、カルチャーセンターに能面師の姿はなかった。荒さんによると、草分けは三越と渋谷東急のカルチャーセンターとのこと。

能面は本来、能の宗家や三井などの美術館が所蔵しているもので、秘蔵されるか、能舞台でしかお目にかかれないものだった。だが、三越の美術部などで扱われ、それがきっかけで、カルチャーとして



荒さんの作業場

先人の名工が創ったものをひたすら真似て、その神髄に少しでも近づこうとする仕事」と言いながらも、創作への意欲も捨てがたくあ

庶民の前に現れるようになった。それは、今からわずか四十数年前のことだ。

以来、能面に関心のある人が増え、各地で能面教室が開講され、展示会もたくさん開かれるようになった。特に関心の高いのは、リタイアしたシニア世代だ。荒さんの場合は先祖のDNAが関係していたようだが、そうでなくても、年齢を増すにつれ、日本の伝統的なものに魅かれる人は多い。

おそらく、これはいいことだと思おう。日本が誇る伝統工芸や伝統文化の世界は、今や、後継ぎがいなくて困っている。また、宗家が代々引き継ぐのもいいかもしれないが、そこに新しい血が入ること

で、さらに盛んになる。

荒さんによれば、能面打ちに求められるのはまず感覚・感性だそう。器用・不器用は人によって違うから、徐々に身に付けていけばいい。本文にも書いたが、急ぎ仕事はかえってよくないのだ。展

ると感じた。

■荒さんの能面工房「李右衛門亭」

東京都足立区花畑6-32-1

TEL・03(38850)9092

示会などで「これ3か月で作ったんですよ」と自慢する人がいるが、大事なことに気がついていないんだなあと思うことがある。

このスローテンポ、精神性も、リタイア世代向きではないだろうか。現役時代に身を粉にして働いたのだから、これからは、自分のペースで楽しみながら、もうひと働きすればいいのだ。

人生が終わってしまったようなシニアに引き継いでどう思うだろうかかもしれないが、寿命が延びたおかげで、今や人生は確実に2度ある。十分に活躍できる。

そして、年を取らない人はいない。今の若者だって、ある年齢になれば、そういうものに関心が高くなるのではないか。今、引き継いでいるシニアがこの世から消えるころには、次の世代のシニアが引き継いでくれるだろう。これこそが、究極の伝統工芸の伝承である。

リタイア世代も、楽しみながらおいに伝統を学んで、次の世代に引き継ぐ役目を担おうではありませんか！